

家庭画報

旅企画満載!

家庭画報トラベル号

7

July 2014

KATEKIAHD

夏の
特別企画

京都「祇園祭」の粋

京都の夏を旅する〈日本の祭りと涼の美味〉

家庭画報オリジナル

「王妃」の金運占い
2014年下半期

五〇代から始めるダンス
「踊る」アンチエイジング
フランスの華麗なる「花火」
三浦朱門・曾野綾子
往復書簡「我が家の内輪話」
姜尚中のカルチャートーク

本誌独占取材

一生の思い出となる九州の旅へ

夢の豪華列車「ななつ星」の魅力

ガウディの軌跡を巡る旅

ホテルで涼やかに——夏、美味を楽しむ

日本・スペイン交流四〇〇周年記念

ミラノ、バームビーチ、NY、トスカーナ現地取材
優雅に生きるマダムたち〜エレガンスの美学



奇才の建築家、アントニ・ガウディ。
その才能の軌跡を見たいと
スペイン北部のコミーリャス、
アストルガ、レオン、
そしてガウディ建築の聖地バルセロナ、
欧州でも有数のリゾート地・マヨルカ島を
訪ねました。
彼の知られざる一面を探したいと思います。

撮影/淺川 敏 取材・文/鈴木紀慶
コーディネート/NASPLE & ASAKURA、守屋照見、中谷恒子
取材協力/スペイン政府観光局

ガウディの 軌跡を巡る旅

日本・スペイン交流四〇〇周年記念



1882

サグラダ・ファミリア教会

—— バルセロナ



若き日の
ガウディ建築を
見
北部の街へ



1883 エル・カプリチヨ

コミーリヤス

一八八三年、ガウディは三二歳。サグラダ・ファミリアの二代目主任建築家に就任した年でもありました。同年、スペイン北部のカンタブリア州コミーリヤスに、資産家・キハーノの夏の別荘を設計します。完成は一八八五年。

ここではムデハル（イスラム教芸術）とスペインのキリスト教芸術が融合した様式）やゴシック、オリエンタルなど多様な建築様式や、豊かな色彩と装飾、そして鉄、レンガ、タイルなどさまざまな素材を使っています。エル・カプリチヨ（気まぐれ）。の名はそうした多要素を混在させたことに由来するともいわれています。ガウディは同級生のクリストバル・カスカンテに現場監督を一任し、施主とは一度も顔を合

わせることがなかったといわれています。学委員のカルロス・ミラベツシュさんは「モデルニスモ（スペインのアール・ヌーヴォー）が登場する三年前に完成しているのです、モデルニスモのルーツといえるかもしれません」と語ります。

「エル・カプリチヨ」をパティオのベンチから見上げるアントニ・ガウディの像。洞窟が設けられた回遊式庭園もガウディのデザイン。P.121/タイルを貼りつけた塔がアラブ風の雰囲気を出す。



上・窓の開閉時に音が鳴る仕組みと、カーテン代わりの内扉が戸袋に納まる仕組みの解説図。
下・メインサロンの連続窓。この窓のバランスウエイトには、音色の異なる筒状の鐘が仕掛けられ、開閉時に心地よい音を奏でる。



右上・コミーリヤスは雨が多く、日照が貴重なことから、邸宅は日々の生活を太陽の動きに合わせて部屋を移動しながら暮らせるようにレイアウトされている。それを象徴するかのよう、ヒマワリの花と葉を彫り込んだ装飾タイルを外壁に使用。
右中・音楽家でもあったキハーノに敬意を込めて作られたギターを弾く蜂のスタンドグラス。
右下・2つの大きな窓から光が入るギャラリー。
左上・ピアノを弾く鳥のスタンドグラス。
左中・応接室の天井。部屋ごとにさまざまな意匠を用いている。
左下・応接室の腰壁。装飾は、天井と同じくすべて異なっている。

●EL CAPRICHIO DE GAUDÍ/
Barrio de Sobrellano, s/n, 30520 Comillas, Cantabria

1889 アストルガ司教館

アストルガ

ガウディと同郷レウス出身の司教ジョアン・グラウから依頼された「アストルガ司教館」。ガウディはグラウ司教から多くの典札について学び、建設は順調に進みました。原案では中央にピラミッド型のスレート屋根がかかり、天窓からの光を集め、建物中央の吹き抜きの空間で光を拡散させ、宗教建築にふさわしい壮麗さを演出するように計画されていました。が、一八九三年にグラウ司教が亡くなるのと、建設委員会との対立から、ガウディは途中で手を引いてしまい、彼の構想は幻となってしまいました。

グレーの花崗岩で全体が覆われた外観は、隣接するルネッサンス様式の聖堂や周囲に残る古代ローマの遺構などとも調和しています。



建物は1915年に完成したが、4階と屋根はガウディのデザインではなく、建築家リカルド・ゲレータによるもの。建物全体はネオ・ゴシック様式の城のように見える。現在は、「巡礼博物館」。

●PALACIO EPISCOPAL DE ASTORGA/Plaza de Eduardo Castro, 24700 Astorga

1891 ボテイネス邸

レオン

アストルガ司教館を建設しているときに、レオンの織物商ジョアン・ボテイネスの後継者であったアンドレスとフェルナンデスから依頼され、設計した邸宅です。地下は倉庫、一階は店舗、二階は二戸のオーナー住居、三、四階に賃貸用住居(各階四戸)を加えた都市型建築でした。北ヨーロッパにあるようなゴシック風の館のように見えますが、建物の四隅に塔を配したのは、光と風を採り入れるため、また最上階には天窓も設けられています。ガウディ自らが竣工まで手がけた数少ない建物です。竣工は一八九二年。

一九九四年から九六年にかけて修復工事が行われ、現在はスペイン貯蓄銀行の文化センター。一般公開もされています。



右上・繊やかなアーチを描くカタルーニャ・ヴォールトの1階天井。錆鉄製の柱や鉄製の梁の採用で外壁以外に荷重を支える壁がなく、各階ともレイアウトが自由になっています。

右下・正面ファサード。エントランスの彫刻は、ドラゴンと闘うカタルーニャの守護聖人サン・ジョルディ。

左上・四隅にある塔の屋根表。上部からも光が降り注ぐ。

左中・中庭に面した階段室の窓にも通風のための工夫が。

左下・塔の下の1階の壁の角にも光と風を入れる窓を設置。

●CASA BOTINES/Plaza San Marcelo, 5, 24003 León

1883 いよいよバルセロナへ カサ・ビセンス

バルセロナ

タイル商マヌエル・ビセンスのための夏の住宅として建てられた「カサ・ビセンス」は、ムデハル様式が採用され、青と白を市松模様貼った施釉タイルと粗石の質感を効果的に対比させて使用した外観が印象的。タイルの絵模様には同年に着手したコミーリヤスの「エル・カブリチヨ」と同じヒマワリのタイルやイスラム・カーネーション、鑄鉄の柵にはシユロの葉がモチーフに使われています。竣工は一八八八年。

食堂はフルーツのレリーフが組み込まれた小梁の天井。喫煙室はまた圧巻で、イスラム建築の宮殿の天井に見られるムカルナス（鍾乳石飾り）と呼ばれる技法を採用していて、不思議な趣があります。二〇〇五年には世界遺産に登録されましたが、その後売りに出され、現在はMora Bancが買い取って、一般公開に向け、修復工事が行われる予定になっています。



ディの特徴ともいえる、うねるベンチがあるトリビューン。トリビューンとは、もとはローマの中央広場に設けられた演壇のことだが、側面に突き出たサンルームのような空間のこと。スタンドグラスは、アントニ・ビネダの作。

カサ・ビセンスの全景。エル・カブリチヨと同じ時期に設計されたこともあり、こちらもアラブ風の印象が強い。

「エル・カブリチヨ」と同じヒマワリ柄、その下にはイスラム・カーネーション柄タイル。カタルーニャの童謡の歌詞も書かれている。

使用時は壁の中に収納される引き戸とレール。ガウディが1888年のバルセロナ万博の日本館を見て取り入れたもの。

VICENS / Calle de les Carolines, 24. 08012 Barcelona





1階の奥にあるアラブ風の喫煙室。
ムカルナス(鏤乳石飾り)の
天井とレリーフ壁、
床はモザイクタイル。
E121/下・ネリエンタルな雰囲気
の食堂。左奥がトリゼーション、
右奥が喫煙室。
各部屋の天井の装飾はすべて異なり、
食堂の天井には、
ブルーのレリーフが
組み込まれている。

1886 グエル邸

バルセロナ

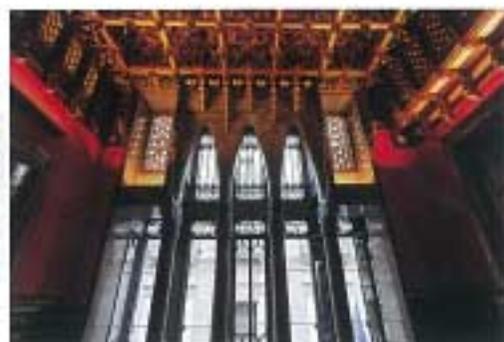
ガウディの生涯のバトロンであったエウセビ・グエルは、一八七八年のパリ万国博覧会で、手袋を展示した精巧なショーケースを見てガウディの才能を見抜き、別邸の門扉や門番小屋の設計を依頼。続いてこの本邸宅を依頼します。以来、二人の関係は一八一八年にグエルが亡くなるまで続きます。

二階にあるキユーボラのある吹き抜けになったメインサロンは圧巻で、放物線を描くドームになった天井から自然光が点光源となって降り注ぎます。ここは宗教的な祈りの場として、また音楽会などの集まりの場として二重の機能を持った空間です。屋上の煙突のユーモラスな表情、地下の厩舎・馬車庫にはキノコ型の丸柱が連続するなど、後の作品「コロニア・グエル地下聖堂」の素地も感じられます。

一八八八年のバルセロナ万博の開催に合わせて竣工。迎賓館の役割も果たし、イタリヤ国王、アメリカのクリーヴランド大統領らが訪問しました。



上・屋上の煙突と換気口は、彫刻作品にも見え、後の「カサ・ミラ」「カサ・パトリョ」に継承される意匠。中央はサロンのドーム天井を覆う塔。中・2階中央サロンのドーム天井に穿った穴から光が降り注ぐ。右上・地下の厩舎・馬車庫。天井のカタルーニャ・ヴォールトは薄いレンガをずらして3層に貼り、曲面板をつくる方法。右下・イスラム様式を強く印象づける応接室の吊り下げられた格天井。左上・正面エントランスの2つの放物線アーチ。その間にあるのは、鍛鉄製のカタルーニャの紋章。左下右・御戸のような鉄製のブラインドが設置されたパティオ側のサロンの出窓。左下左・植物をモチーフにした2階応接室の照明。



1895 ボデー・ガ・デー・ガラーフ

バルセロナ郊外

バルセロナの近郊、地中海を望むガラーフ地方、シツチエスの町にある酒蔵兼管理人用住居で、これもグエルの依頼です。ガウディには珍しい三角形のシンブルな建築で、一九二八年にバルセロナを訪れたル・コルビュジエは「街道で一つのモダンな家が私の注意を引いた」と、この建物を見たときの印象を語っています。



上・テラスの奥は小さな礼拝堂。下右・要塞のような外観だが、構造はレンガ造、外壁は石貼り。下左・鉄細工による銅の門。



エントランスアプローチから見た西側のファサード。1901年に竣工。現在は右隣の建物がレストラン、礼拝堂は結婚式場として使用されている。左の三角屋根の頂上から飛び出した角は、煙突と換気塔。

●GAUDÍ GARRAF/Ctra. de Barcelona a Sitges, a 25km de BCN. (C31), 08871 Garraf-Barcelona

一八年前の新発見

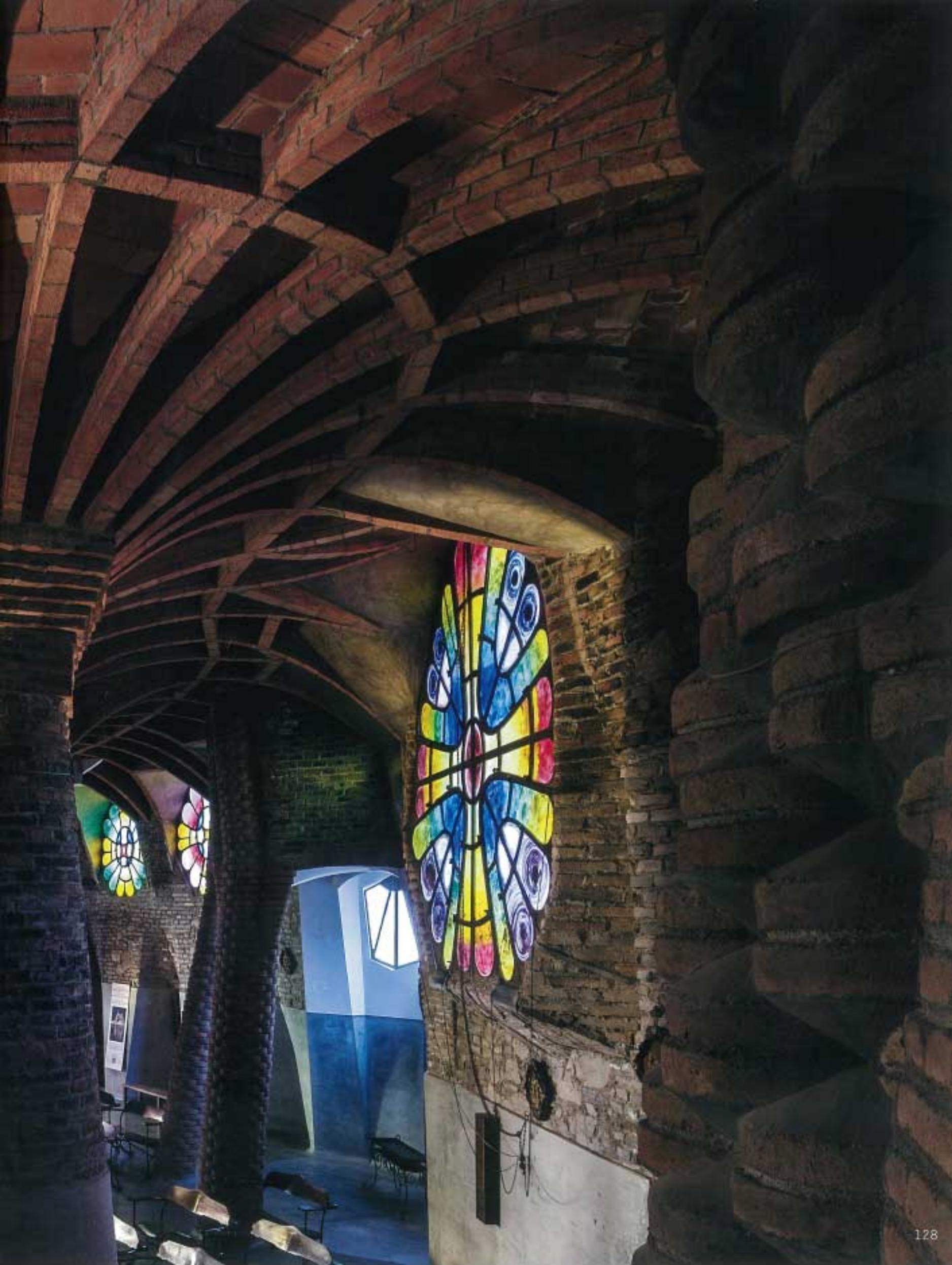
丹下敏明(建築新バルセロナ事務所代表)

サグラダ・ファミリア教会が日に日に完成に近づいているというのに、実はガウディの研究はここ半世紀以上も大きな進歩がなかった。一九三六年七月十九日、サグラダ・ファミリアの敷地内のアトリエにあった膨大な図面、スケッチ、あるいは蔵書、書簡等すべてがアナキストたちの教会焼き討ちにあつて灰となってしまったのが、その原因だ。一九二六年六月十日の彼の死以来、弟子たちがガウディの残した膨大な仕事を整理し、写真に収めることができたのは僅かな部分だけであった。二〇世紀の人物でありながら、ほとんど手垢のついたものはない。

今から二八年前に、偶然その状況が変わった。マヌエル・メダルデという一人の考古学者がコロシア・グエルの地下聖堂の調査中に、トンネルを発見したのだ。最後にガウディがここを訪れた一九一四年十月四日以来、その日まで眠っていたもの。それはトンネルの中や当時の作業員の家から見つかった五八四二枚のガウディのサイン入りインボイスであった。その内容を読み取れば、ガウディの設計プロセスが手に取るように分かる。例えば、材料実験のために使う素材のサンプルを悉く工業大学に送って実験データを得るといふ実証主義者ガウディの姿が浮かび上がってくる。カメラマンへの支払いも多々あり、恐らく世界で初めて建築の設計プロセスに写真を取り入れたであろうことも分かってきた。あるいは地下聖堂にあるベンチ製作の手間賃はあるが材料費がないことから、ベンチの木はグエルがイギリスから買い付けた機械機械の梱包木箱のオーク材、ドアは足場に使われたユーカリ材を利用したことが分かる。また地下聖堂の奥の小さな階段に関しては、同じインボイスが五枚あつて全てガウディのサインがあり、気に入らず四回もやり直させた完璧主義の部分が窺える。メダルデ氏の発見とそれに関する研究は、間違いないガウディ研究の方向を開き、実証主義的な研究が行われることだろう。



上・ガウディのサイン入りインボイスを発見したマヌエル・メダルデ氏。修復工事の基礎調査を依頼され、トンネルの存在を発見。さらにコロニーの住民への聞き取り調査で、ガウディが村に来ていた頃の左官、大工など数名の作業員生存者を引き止める。彼らや僧侶の家などからもインボイスが発見された。下・ガウディが気に入るまで四回もやり直させたという聖堂への階段。



1898

コロニア・グエル地下聖堂

バルセロナ



グエルは、バルセロナの西にあるサンタ・コロマ・デ・セルベリヨに、繊維工業の労働者住宅地(コロニア)を建設します。学校、商店、娯楽施設などをつくり、教会の設計をガウディに依頼。しかし、グエルの死を前にした一九一六年に建設は中断し、地下聖堂は未完の形で残されました。

ガウディはこの聖堂建設のために、一八九八年から一〇年にわたって逆さ吊り実験(フニクラ)を行っています。ロープを垂らして、荷重が分布する支点に鉛を入れた袋を吊るし、理想的な構造体としての形を探求。フニクラによって得られた形状を写真に撮り、逆さにして写真の上に完成図を描いたといわれています。



上・地下聖堂の入り口前の洞窟のようなポーチ。

下右・双曲面形の窓。

下左・ステンドグラスは、ガウディの助手ジョゼップ・マリア・ジュジョールの作。

P.129/地下聖堂の内部。

斜めになった柱から放射状に広がるレンガのアーチ。

コーラスの声が響くように、

祭壇の裏側に空気層のトンネルを設けるなど、音響設計にも工夫。

●CRIPTA DE LA COLONIA GÜELL
C/Claudi Güell, s/n, Colònia Güell, 08930
Santa Coloma de Cervelló



「ガウディと洞窟」

鳥居徳敏(神奈川県立大学教員)

毎年一月六日に発表されるカタルーニャ語文学賞の「ブラ賞」は著名な文筆家ジュゼップ・ブラ(二八九七―一九八二)の業績を記念して一九六八年に創設されたものである。そのブラが若いころを思い出し、一九五九年にこう記す。

「私は自分の育った文化から離れることができない。…水族館の内部にいると思わない限り、カサ・ミラの外観は理解できない。ガウディは魚群の遊泳する様子を眺める最適手段として、曲がりくねった壁面の通路や部屋を建設したのだ」

現代のわれわれには意味不明の文章であろう。これを理解するには、ブラの育った時代文化を知らなければならぬ。

当時は洞窟発見の時代であり、鍾乳洞が発見されると画報雑誌(写真が普及する前の視覚情報誌)の目玉図版としてその摩訶不思議な世界が大々的に報道された。カタルーニャでは一八九七年に三三三個知られていた洞窟は、わずか十年で四六七個に達する。地質学に「洞窟学」が生まれるのもこの時代であった。

キリスト教の世界ではバレスティナからの新情報として「降誕の洞窟」「授乳の洞窟」、あるいは「ゲッセマネの洞窟」といったイエスの生涯に欠かせない聖窟情報が届き、洞窟状の「ルールドの祭壇」がブームになっていた。オペラ界ではワグナーが一世を風靡し、「タンホイザー」や四部作「ニーベルングの指輪」は洞窟をメインテーマとし、ヴェルヌの空想科学小説「地底旅行」でも鍾乳洞や地底の海が舞台となり、「海底二万里」ではネモのノーティラス号が海底洞窟の世界を回遊する。世はまさに洞窟ブームの時代であり、人工洞窟は公園や庭園の目玉施設になっていた。



1806年に発見されたというマヨルカ島のアルタの鍾乳洞。

一九世紀半ばまで水族館は存在しなかった。酸素を含む大量の水の交換手段と展示に不可欠な大型厚板ガラスがなかったからだ。モーターが出現し、二二〇mm厚の板ガラスの製造が可能になるのがこの時代であった。だが、水温を一定に保つ技術がなかったのだ。そのため、温度の変化しない地下に水族館を建設する必要があった。この条件と洞窟ブームが連動し、地底洞窟や海底洞窟の水族館が生まれることになる。ブラのいう水族館とはこの洞窟造形の施設を指していたのだ。

1904 マヨルカ大聖堂

マヨルカ島



一三〇一九世紀と長い時間をかけて建築されたと伝えられ、世界のゴシック大聖堂の中でも最大規模を誇り、ゴシック、初期ルネッサンスのプラテレスコ様式が混在するこの大聖堂。

司教からの依頼で、ガウディは修復を引き受けます。聖歌隊席や役僧席を移動し、重々しいゴシック様式の空間に光を入れるため、ステンドグラスの大窓や電

器照明を用いた装飾を加えました。司教の声を場内に響かせるため、説教壇の上につける反射板も設置。しかし、依頼主のバルセロー司教が病に倒れると、色彩豊かなガウディのプランに難色を示す改修委員会と意見が合わず、一九一四年にガウディは手を引いてしまいます。現在ある祭壇上の天蓋飾りは仮設のまま。木と紙、カボチャの皮でつくられています。



主祭壇はプラテレスコ様式。それを囲む空間はゴシック様式。ガウディのつくった薔薇窓から差し込む陽光が堂内を巡り、神秘的空間を映し出す。典葬な祭壇上の天蓋飾りには電気照明が用いられた。試作品だった仮の天蓋(1912年設置)がそのまま、今に至るまで残っている。

●CATEDRAL DE MALLORCA/
Plaza Almoina, s/n 07001 Palma de Mallorca

1904 カサ・バトリョ

バルセロナ



バルセロナのメインストリート、グラシア通りに建つ既存の建物をガウディが改築したもの。隣接するブッチ・イ・カダファルク設計の、当時流行のモデルニスモ様式の「カサ・アマトリエー」に見劣りしない邸宅にしてほしいという施主の要望に応えた設計です。ドラゴンのような大胆にうねる屋根、曲線を多用したやわらかくうねるファサード、骨のような

柱、仮面のようなバルコニー、一階の階段はまるで巨大な脊椎動物の背骨のようにも見えます。

二階の天井は渦を巻き、天井面と壁は溶け合うかのように一体に。このような複雑な造形は、石膏で原寸模型を作らせ、それを鋳物職人に渡すという方法で、三次元の造形を可能にしたと、ガウディ研究家の丹下敏明さんは指摘しています。

上・砂岩を削ってつくった有機的なファサード。左隣がカサ・アマトリエー。下右・2階メインサロンの渦巻く天井。1906年完成。下・この建物のテーマは「地中海」。吹き抜けには青いタイルが貼られている。



●CASA BATLLÓ/Passig de Gràcia 43, 08007 Barcelona

1906 カサ・ミラ

バルセロナ



「カサ・ミラ」は波打つような石積み面のファサードから、「ラ・ベドレラ（石切り場）」とも呼ばれています。実際に建物の荷重を支えているのは外壁ではなく、鉄筋の入った石の梁やレンガ壁で、そのためにより自由な造形が可能になりました。

二つの中庭（光庭）が設けられ、それを取り巻くように住戸が配された、地上六階・地下一階の建物です。地下にはバルセロナ初のガレージがあり、屋上は起伏に富み、幻想的なテーマパークのよう。当初、ガウディはファサードにマリア像を安置する予定でしたが、反カトリック暴動などで実現できなくなると現場から手を引き、最後は助手のジュジョールらによって一九一二年に完成されました。



右上・門から中庭に続く通路の天井は花の絵で飾られ、粗い石の柱が支えている。ラ・ベドレラという別称からか、洞窟のような印象も。



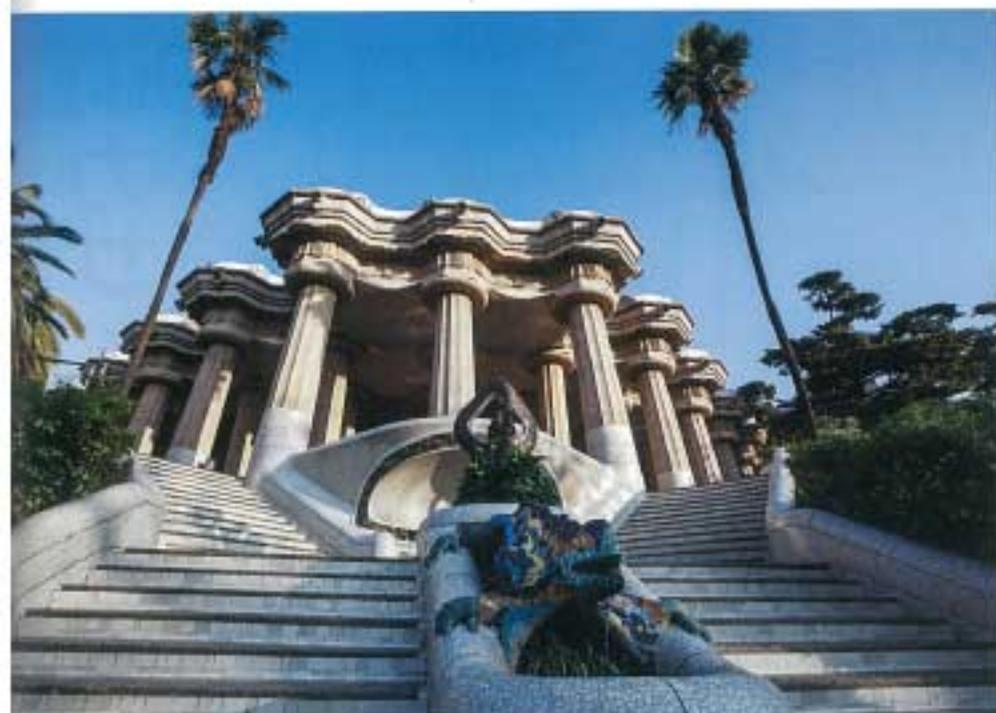
右下・カタルーニャ・ワールドの上につくられたうねる屋上。煙突や換気口は鎧をまとった兵士の像のようにも見える。

左・円形の吹き抜け。外観や吹き抜けだけでなく、内部の平面プランも曲線で構成されている。

●CASA MILÀ/Provença 261-265, 08008 Barcelona

1900 グエル公園

バルセロナ



バルセロナの北西、ペラダ山の南斜面に広がる一五〇の広大な土地。グエルはここを整備して、田園型住宅地にしようと考えました。六〇棟の分譲地が完成しましたが、実際に分譲されたのは二棟だけで、一棟はガウディ、もう一棟はグエルが購入したといわれています。計画が頓挫した後、ガウディは地形を生かしたテーマパークのような公園につくり替えました。グエル没後はバルセロナ市に寄付され、一九八四年に世界遺産として登録されています。

八六本のドーリス式列柱で支えられた空中の人工地盤広場。また、その広場から茶褐色の無骨な岩肌を露わにした回廊がくねくねと延びています。ガウディが一時期暮らした住居は、現在ガウディ博物館になっています。



●PARK GÜELL/Carver d'Olot, s/a, 08024 Barcelona



上・階段途中のドラゴン。口からは水が流れ出す。階段上は市場になる予定だったドーリス様式の多柱式ホール。列柱の上が広場。

下右・正面脇の守衛所。ヘンゼルとグレーテルの世界を模した屋根の頂部にはキノコ、右の煙突の先端にはダブル十字架を冠している。

下左・人工地盤の広場の両縁部は波打つような形のベンチになっている。ここでも、ガウディは不良品のタイルや割れた食器の再利用を考え、仕上げ材として使っていた。列柱の下には雨水を溜める貯水槽があり、乾燥地帯ゆえのエコへの配慮も。

1900 ベリエスグアルド邸

バルセロナ

ベリエスグアルドとは、カタルーニャ語で美しい眺めという意味。その名の通り、かつてカタルーニャの最後の王マルティン一世の離宮があった高台にあって、バルセロナの街と海を眺望することができます。建物は塔をいただくゴシック様式で、構造はレンガ造ですが外壁に地元のスレート質の岩を貼っているため、中世の城のような印象があります。一九〇九年に完成。

エントランスホールには東方三賢人が見た星を表す星形のステンドグラスがあり、壁や天井は曲線が多用されています。最上階は、薄いレンガを貼り合わせてつくった半円のアーチが連続するギャラリーです。ここは音楽ホールも兼ねていて、ロフト部分の天井近くに音楽隊の場所が用意されています。音楽好きのガウディが音響効果も考えて計画したものです。癌研究の専門医だったギレラ氏が一九四五年に購入し、現在はその一族が暮らしています。



上右・壁はアラブ風のタイル。傘立てとベンチも当時のもの。
上左・ガウディの遊び心が感じられる屋上。
巨大なドラゴンの目に見立てた屋上の二つの明り窓。
中・最上階のギャラリー。音楽ホールとしても使われ、演奏者は連続するアーチの間に上がって演奏したといわれています。
下・眺めがよい3階のサロン。天井の連続するアーチが美しい。



上・ベリエスグアルド邸の外観。
外壁の素材は、地元の灰、茶、緑の色合いをもつ天然スレート。
ファサードのベンチと庭は、完成後ガウディの助手ドメネク・スグラニェスによるもの。
下・ベリエスグアルド邸に暮らすファミリー。
●LA TORRE BELLESGUARD / C / Bellesguard, nr16, 08022 Barcelona

